ＩＢの教育効果に関する調査研究事業

令和３年度研究成果報告書

東京学芸大学　教職大学院

研究代表者

赤羽　寿夫

目 次

０．はじめに

１．本研究の概要

２．R3 年度の研究概要

３．R3 年度の研究体制

４．R3 年度の研究方法

５．R3 年度の研究結果と考察

６．R3 年度の結論と R4 年度の研究計画

７．参考文献

【資料１】「改善を要する点」への対応

【資料２】R3 年度研究実施体制

【資料３】R3 年度活動記録

【資料４】アンケート質問紙各種（小学校用、中学校用、高等学校用）

【資料５】R4 年度研究計画

０．はじめに

R3 年度下半期の研究を進めるにあたり、2021 年 8 月 30 日付で指摘を受けた「改善を要する事項」への対応を検討した（資料１）。その結果、研究全体の当初デザインを次のように修正することにした。

① 「選択回答形式のアンケートは、児童生徒の ATL スキルを評価する手法としては適切さを欠く」との指摘を受け、アンケート調査は予定通り R3 年度に実施するものの、本研究の主眼を「ATL スキル『そのもの』」から「ATL スキルに対する児童生徒の『自己効力感』」に変更することとし、それに伴い研究全体におけるアンケート調査の位置づけを見直した。

> 「自己効力感（self-efficacy）」とは一般に、自分がある状況において「必要な行動をうまく遂行できる」という自身の可能性を認知（自覚）している状態を指す。本研究では、「ATL スキルの有用性についての学習者自身の実感や自覚」に、この「自己効力感」という言葉を充てる。

② 研究主眼の変更に伴い、インタビュー調査を本研究の中心的手法に位置付けた。アンケート調査から得たデータは、インタビュー調査の基礎資料として使用する。インタビュー調査の信憑性および再現性を確実にするため、R3 年度には予備調査を行い、聞き取りのポイントを絞り込んだ。また、全研究期間を通してインタビュアーを同一人物に固定することで、調査データの精度を上げることとした。

１．本研究の概要

IB 教育が重視する ATL（Approaches To Learning）とは、コミュニケーションスキルや、人と協働して取り組むスキル、批判的に物事を考えるスキルなど、学校教育における児童生徒の学びを個別最適な形で結実させるための「学習の基盤となる能力」を指す(1)。日本の学校教育でもこの ATL に類するスキルを児童生徒に如何に修得させるかは、最重要課題の一つに位置づく(2)。現場の教師の間では、総合的な学習環境、特に海外校での学習履歴を有する学友との協働的な学びが、日本校での経験しかない子どもたちに影響を与え、結果、教育課程全体の ATL スキルの深まりを促進しているのではないかという肌感覚は確かに存在する。そこで本研究ではこの点に着目し、児童生徒の ATL スキル向上策についての科学的な分析根拠に基づいた示唆を得ることを目的とする。

本研究では、IB カリキュラムを基盤とし、海外校での学習履歴を有する児童生徒と共に学ぶ環境を整備している東京学芸大学附属学校（以下、IB 校）と(3)、そのような趣旨での環境は未整備な、典型的な日本型学校教育を実施している公立学校（以下、非 IB 校）のそれぞれに在籍する児童生徒を調査することで、ATL スキルの実感を伴った理解に学習者が至

った要因、特に人的環境面の効果について考察する。

２．R3 年度の研究概要

R3 年度は、研究全体の基盤構築を目的とした。IB 校および非 IB 校のそれぞれで児童生徒にアンケート調査を実施し、本研究における調査対象校の妥当性を検証するとともに、R4 年度に実施予定の本調査の対象者を絞り込んだ。

3. R3 年度の研究体制

R3 年度は資料 2 のような体制で研究を実施した。研究活動の具体は資料 3 に示す。

４．R3 年度の研究方法

4-1. 調査対象

表 1 には本研究の調査対象の詳細を示した。表中の「相当学年」は、R3 年度時点のものである。非 IB 校の小学校 6 年生は R4 年度の本調査の対象外であるが、対象校の特徴を把握するために R3 年度の調査対象に加えた。非 IB 校の高等学校 1 年生については対象校の事情から、調査は実施できなかった。

表1;調査対象

本文中の表記	相当学年	標本数（人）	調査対象校
IB校	小学校5年	105	東京学芸大学附属大泉小学校
	小学校6年	35	
	中学校1年	86	東京学芸大学附属国際中等教育学校
	中学校2年	67	
	高等学校1年	70	
	高等学校2年	80	
非IB校	小学校5年	46	東京都武蔵野市立井之頭小学校
	小学校6年	26	
	中学校1年	53	東京都西東京市立柳沢中学校
	中学校2年	64	
	高等学校2年	75	高知県立高知西高等学校

4-2. アンケート調査

各調査校におけるアンケート調査の実施日は資料 3 に示す。東京学芸大学附属国際中等教育学校では、現場の事情から、アンケート質問紙を家庭へ持ち帰っての実施となってしまったために（資料 1 参照）、中学生（前期課程）および高校生（後期課程）の両調査とも実

施日の特定ができず、「12 月中旬以降」と記した。

実施したアンケートの具体は資料 4 に示す。質問 1（国籍）と質問 2（外国での学習経験）は属性分類の指標とした。また個人識別タグとして、誕生日を記載させた。質問 3～質問 12 の意図（ATL スキルとの関係）は表 2 の通りである。言語能力の学年差に起因するバイアスを最小にするため、質問文は、学校種ごとにその表現を工夫した（資料 4)。回答は、「全く当てはまらない」「当てはまらない」「少し当てはまる」「当てはまる」「とても当てはまる」の 5 段階とし、それぞれに順不同で 1～ 5 の値を与えることで数値化した。

表2;各質問が意図する ATL スキル

	質問文例	想定したATLスキル
質問3	他者の考えを理解したり、自分の考えを上手に伝えることができる	コミュニケーション
質問4	問題を解決するために、他者と積極的に協力することができる	協働
質問5	自分のスケジュールを管理し、自らの時間管理とそのコントロールができる	管理・調整
質問6	自分の気持ちやモチベーションをコントロールし、挫折や困難に効果的に対処することができる	情動
質問7	これまでの経験や学びを、しっかりと反省することができる	振り返り
質問8	必要な情報（テレビなどで得られる知識）を集めたり、多くの情報の中から必要な物とそうでないものとを選択することができる	情報リテラシー
質問9	情報を正しく理解することができる	メディアリテラシー
質問10	得られた知識について、自分の言葉で理解し、説明することができる	批判的思考
質問11	全く新しい理由や考えを、思いつくことができる	創造的思考
質問12	初めての問題でも、それまでの経験や知識を使って解決することができる	転移

4-3. 標本の分類

アンケートによって得られたスコアは表 3 に示す属性で分類し、調査対象校の特徴を定量的に分析した。カテゴリーA では、「日本校での学習経験しか持たない児童生徒」が「海外校での学習経験を有する児童生徒」と協働的に学べる環境に有るかという観点から、4 つのグループに分けた。カテゴリーB および C は、カテゴリーA での分析結果の妥当性を検証するための対照群となるように設定した。

表 3;データの分類（被験者の属性）

カテゴリー	グループ	グループの説明	本文中の表記
A	①	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「無い」児童生徒	A①
	②	「非 IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「無い」児童生徒	A②
	③	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「有る」児童生徒	A③
	④	「非 IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「有る」児童生徒	A④
B	①	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「無い」「日本籍」のみを有する児童生徒	B①
	②	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「有る」「日本籍」のみを有する児童生徒	B②
	③	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「無い」「外国籍」を有する児童生徒	B③
	④	「IB 校」で学ぶ、海外校での学習経験の「有る」「外国籍」を有する児童生徒	B④
C	①	「IB 校」で学ぶ児童生徒	C①
	②	「非 IB 校」で学ぶ児童生徒	C②

4-4. インタビュー調査（予備調査）

本研究では、児童生徒の ATL スキルに抱く自己効力感を、インタビュー調査によって定性的に分析する。R4 年度の本調査に向けて質問の内容と分析の観点を絞り込むため、R3 年度は予備調査を行った。

5．R3 年度の研究結果と考察

5-1. 標本の妥当性

標本の属性別統計量は、表 4 の通りである。

表4;標本の全体像

カテゴリーA　統計量

		度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
質問3	A-①	296	3.861	.8302	.0483
	A-②	257	3.580	.9973	.0622
	A-③	142	3.930	.8134	.0683
	A-④	5	4.400	.8944	.4000
質問4	A-①	297	4.024	.8519	.0494
	A-②	254	3.819	.9486	.0595
	A-③	142	4.176	.7274	.0610
	A-④	5	4.000	1.0000	.4472
質問5	A-①	295	3.434	.9802	.0571
	A-②	256	3.375	.9901	.0619
	A-③	142	3.444	1.0281	.0863
	A-④	5	3.600	.5477	.2449
質問6	A-①	296	3.743	.9681	.0563
	A-②	256	3.563	1.1150	.0697
	A-③	142	3.690	1.0048	.0843
	A-④	5	4.200	1.3038	.5831
質問7	A-①	297	3.933	.8634	.0501
	A-②	256	3.707	1.0001	.0625
	A-③	142	3.866	.9166	.0769
	A-④	5	4.400	.8944	.4000
質問8	A-①	295	4.037	.8383	.0488
	A-②	256	3.781	.9533	.0596
	A-③	142	4.035	.7937	.0666
	A-④	5	4.200	.8367	.3742
質問9	A-①	295	3.881	.8976	.0523
	A-②	253	3.696	.9461	.0595
	A-③	140	4.043	.8035	.0679
	A-④	4	4.250	.9574	.4787
質問10	A-①	296	3.872	.8774	.0510
	A-②	252	3.575	.9267	.0584
	A-③	140	4.036	.8259	.0698
	A-④	4	4.500	1.0000	.5000
質問11	A-①	296	3.814	.9581	.0557
	A-②	253	3.478	1.0859	.0683
	A-③	140	3.907	.9588	.0810
	A-④	4	4.250	.9574	.4787
質問12	A-①	297	3.997	.9135	.0530
	A-②	254	3.539	1.0081	.0633
	A-③	139	3.950	.8708	.0739
	A-④	4	4.000	.8165	.4082

カテゴリーB　統計量

		度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
質問3	B-①	278	3.86	.842	.050
	B-②	111	3.95	.796	.076
	B-③	17	3.94	.659	.160
	B-④	31	3.87	.885	.159
質問4	B-①	279	4.00	.855	.051
	B-②	111	4.19	.745	.071
	B-③	17	4.29	.772	.187
	B-④	31	4.13	.670	.120
質問5	B-①	279	3.45	.987	.059
	B-②	111	3.46	.989	.094
	B-③	15	3.27	.799	.206
	B-④	31	3.39	1.174	.211
質問6	B-①	278	3.72	.974	.058
	B-②	111	3.70	.959	.091
	B-③	17	4.12	.781	.189
	B-④	31	3.65	1.170	.210
質問7	B-①	279	3.94	.871	.052
	B-②	111	3.85	.936	.089
	B-③	17	3.88	.781	.189
	B-④	31	3.94	.854	.153
質問8	B-①	277	4.03	.846	.051
	B-②	111	4.05	.824	.078
	B-③	17	4.12	.697	.169
	B-④	31	4.00	.683	.123
質問9	B-①	277	3.88	.909	.055
	B-②	109	4.03	.751	.072
	B-③	17	3.88	.697	.169
	B-④	31	4.10	.978	.176
質問10	B-①	278	3.87	.882	.053
	B-②	109	4.04	.816	.078
	B-③	17	3.82	.809	.196
	B-④	31	4.03	.875	.157
質問11	B-①	278	3.81	.972	.058
	B-②	109	3.84	.983	.094
	B-③	17	3.88	.697	.169
	B-④	31	4.13	.846	.152
質問12	B-①	279	3.99	.927	.056
	B-②	108	3.91	.870	.084
	B-③	17	4.06	.659	.160
	B-④	31	4.10	.870	.156

カテゴリーC　統計量

		度数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
質問3	C-①	442	3.887	.8225	.0391
	C-②	264	3.598	1.0008	.0616
質問4	C-①	443	4.079	.8159	.0388
	C-②	261	3.828	.9471	.0586
質問5	C-①	441	3.449	.9990	.0476
	C-②	263	3.384	.9850	.0607
質問6	C-①	442	3.733	.9788	.0466
	C-②	263	3.586	1.1220	.0692
質問7	C-①	443	3.921	.8825	.0419
	C-②	263	3.726	1.0006	.0617
質問8	C-①	441	4.036	.8222	.0392
	C-②	263	3.795	.9509	.0586
質問9	C-①	439	3.938	.8698	.0415
	C-②	259	3.707	.9477	.0589
質問10	C-①	440	3.932	.8643	.0412
	C-②	258	3.597	.9338	.0581
質問11	C-①	440	3.855	.9601	.0458
	C-②	259	3.494	1.0868	.0675
質問12	C-①	440	3.989	.8992	.0429
	C-②	260	3.550	1.0064	.0624

【回答のスコアリング】

全く当てはまらない＝１

当てはまらない＝２

少し当てはまる＝3

当てはまる＝４

とても当てはまる＝５

まず、それぞれのカテゴリーにおいて属性間に差があるかどうかをノンパラメトリック法で分析した。検定の結果、カテゴリーA では、質問 3, 4, 8～12 で、属性間に有意な差が認められた。カテゴリーB では、すべての質問で属性間に有意な差は認められなかった。カテゴリーC では、カテゴリーA と同じ質問項目で有意な差が認められた。これらカテゴリーB および C の検定結果は、カテゴリーA の結果の妥当性をサポートする。

表5;カテゴリー別の検定結果(有意確率)

	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10	質問11	質問12	
A	.000	.002	.867	.208	.048	.007	.003	.000	.000	.000	KruskalWallis 検定
B	.863	.187	.936	.439	.856	.946	.295	.277	.330	.590	KruskalWallis 検定
C	.000	.000	.455	.160	.024	.001	.001	.000	.000	.000	Mann-Whitney 検定

一元配置分散分析でも表 5 と同じ結果が得られたため (data not shown)、次に、カテゴリーA においてどの属性の間に有意差があるのかを、t 検定で調べた。その結果、属性 A②「非 IB 校で学ぶ、海外校での学習経験の無い児童生徒」は A①「IB 校で学ぶ、海外校での学習経験の無い児童生徒」の間に、質問の 3, 4, 7, 8, 10, 11, 12 において有意な差が認められた。また A②は、A③「IB 校で学ぶ、海外校での学習経験の有る児童生徒」との間にもほぼ同様の項目で有意差が認められた。

表6;カテゴリーA における属性間検定(有意確率)

	A①vsA②	A①vsA③	A①vsA④	A②vsA③	A②vsA④	A③vsA④
質問3	.000	.416	.250	.000	.109	.307
質問4	.008	.053	.961	.000	.708	.716
質問5	.484	.925	.542	.518	.418	.573
質問6	.044	.601	.478	.244	.337	.434
質問7	.005	.470	.309	.109	.159	.256
質問8	.001	.980	.688	.005	.328	.686
質問9	.019	.060	.498	.000	.332	.696
質問10	.000	.059	.298	.000	.161	.423
質問11	.000	.345	.431	.000	.205	.528
質問12	.000	.606	.994	.000	.343	.911

以上の結果は、本研究で独自に開発したアンケートを用いた ATL スキルの自己診断を用いることで、「IB 校」を「非 IB 校」から明確に区別できることを示している。また、IB 校と非 IB 校で差がないスキルがあるという結果は (表 5 C および表 6 の質問 5, 6, (7),(9))、「IB 校」にはもともと IB 教育との親和性の高い児童生徒だけが入学してきている、というバイアスを否定し得る。

5-2. インタビュー予備調査

本年度は、A③に属する IB 校生 3 名（中学 1 年生、中学 2 年生、高校 1 年生の各 1 名）についてインタビューを行った。アンケート回答の信憑性と再現性に留意しながら、インタビューで聞き取った内容を、彼らの「海外校での学習経験」との関係性にも注目しつつ分析した。その結果、R4 年度に実施するインタビュー本調査の分析視点について、表 7 のような示唆を得た。

表7；インタビュー本調査(R4 年度)における聞き取りポイント

視点	聞き取りのポイント
自覚の「形成」	その ATL スキルを意識するようになった時期はいつごろか。
自覚の「想起」	その ATL スキルは、自身にとって重要だと感じているか。そのように感じるのはどのようなときか（テスト、協働的学び、受験勉強、進路選択、その他）。
自覚の「背景」	その ATL スキルは、どのような要因で身についたと思うか（自身の努力、学友の影響、先生の影響、授業での協働的学び、部活、文化祭、その他）。あるいはまだ身につかないと感じている場合、その理由。

6．R3 年度の結論と R4 年度の研究計画

6-1. R3 年度の結論

本年度は調査対象学校の特徴を標本調査から分析した。被験者の ATL スキルに対する自己効力感を調査するためのアンケートを作成し、実施した。定量分析の結果、「IB 校」を「非 IB 校」との比較の中で明確に分離することができた（表 5)。この結果は、実施したアンケートが本研究の趣旨に沿った機能を発揮していることを示すとともに、今回分析した標本が、「日本校での学習経験しかない学習者が抱く ATL スキルに対する自己効力感に及ぼす、海外校での学習経験を有する学友との協働経験の影響」を分析する上で妥当であることを示している。

6-2. R4 年度の研究計画

R3 年度の分析の結果、標本には、ATL スキルの有用性を自覚できていない児童生徒が、「IB 校」「非 IB 校」の双方に存在することが明らかとなった（表 8)。

表8;R3 年度の標本分析から見えてきた本調査対象候補者

			「当てはまらない」もしくは「全く当てはまらない」と回答した人数									
		標本数	質問3	質問4	質問5	質問6	質問7	質問8	質問9	質問10	質問11	質問12
IB校	小5年	105	3	5	4	13	2	3	7	5	5	0
	小6年	35	1	0	3	2	1	0	2	2	2	0
	中1	86	4	2	25	7	5	1	4	4	7	9
	中2	67	2	2	8	4	2	1	2	2	3	2
	高1	70	4	2	15	11	6	5	6	5	6	4
	高2	80	8	3	18	11	7	5	3	3	9	8
非IB校	小5年	46	4	1	6	4	6	3	6	5	6	6
	小6年	26	2	2	1	1	1	3	2	2	2	1
	中1	53	2	1	8	10	4	2	2	2	11	9
	中2	64	8	2	13	5	5	6	6	6	14	8
	高2	75	19	8	15	20	12	7	7	8	13	9

R4 年度は、「海外校での学習経験の無い児童生徒の、ATL スキルに対する自己効力感の醸成における『海外校での学習経験を有する学友』の影響」の調査に適した被験者を、この候補者集団の中から絞ったうえで、学年が 1 つ上がった彼らの自己効力感について、R3 年度と同じアンケート紙を使用した追調査とインタビュー調査を実施し、得られたデータを総合的に分析する。

一般に 5 段階評価尺度法のアンケートでは、その回答データの中に被験者の性格に起因する過誤（以下、システマティック誤差）が含まれる可能性がある。本研究では、例えば、控えめな性格な回答者であれば、各質問のスコアが「3：少し当てはまる」を中心として全

体的に低くなることが予想される。あるいは、回答に協力的でない被験者では、各質問で同じスコアが現れてくることが予想される。そこで R4 年度の調査対象者の絞り込みでは、このようなシステマティック誤差を極力排除すること念頭に置いた。表 8 の対象候補者のアンケート結果を詳細に分析した結果、質問 3〜12 に対して、2 項目以上で「1：全く当てはまらない」または「2：当てはまらない」と回答し、且つ、2 項目以上で「4：当てはまる」または「5：とても当てはまる」と回答した被験者を「R4 年度の調査対象者」として抽出することで、上記のようなシステマティック誤差の影響を最小にできると考察した。

以上の考察に基づき、R4 年度に本調査を予定する対象者を表 9 の通り決定した。対象とする児童生徒へのインタビューは赤羽が担当する。また、インタビューの分析精度を上げるため、対象児童生徒の様子を身近で把握している現場教員へのインタビュー調査も行う。教師への聞き取り調査は藤野が担当する。これらの定性的分析結果を総合し、「IB 校」と「非 IB 校」の比較から解析することで、児童生徒の ATL スキルの自己効力感の深まりとその要因について考察する。

表9;R4年度に調査を予定する対象者(人数)

	被験者の属性	学年（R4年度）	人数
IB校	A①	小6	7
		中2	7
		中3	6
		高2	6
		高3	6
非IB校	A②	小6	5
		中2	7
		中3	3
		高3	10

7. 参考文献

(1) MYP: From principles into practice, International Baccalaureate Organization (2014), https://www.spps.org/site/handlers/filedownload.ashx?moduleinstanceid=38342&dataid=21191&FileName=arts_guide_2014.pdf

(2) 「資質・能力」と学びのメカニズム，東洋館出版社（2017/5/29）

(3) 国際バカロレア教育と教員養成:未来をつくる教師教育，学文社（2020/6/20）

【資料１】「改善を要する点」への対応

2021 年 8 月 30 日付で指摘のあった「改善を要する点」への対応を以下に示す。

指摘事項	対応
研究実施体制の明示	本報告書「資料２」に示した。
研究の進捗状況の報告	本報告書「資料 3」に示した。
研究組織内でのスケジュール管理と共有	「資料 3」の通り運営会議を適切に開催し、コロナ対応に苦慮する現場の実情に即して研究計画の柔軟な調整を心がけるとともに、変更点は研究組織内で共有した。
予備調査の必要性	R3 年度の研究内容が実質的にそれにあたる。
アンケート回答の信憑性と再現性の担保に関する方策	指摘を受け、R3 年度のアンケート結果を再分析し、「ATL スキルに対する自己効力感」が分析可能な被験者を選定するための基準を導出した（本文 6 - 2 参照）。この基準を当てはめることで、R4 年度の調査対象を絞り込んだ。
アンケートの実施形態「対面での実施を検討することが望ましい」への対応	長引くコロナ禍の影響もあって、当初計画の実施に伴う教育現場の負担が想定以上に大きいと判断された。そのためアンケート調査の実施形態については、調査の趣旨を十分に伝えたうえで、最終的には現場の判断に委ねた。
インタビュー調査についての検討	本研究におけるインタビュー調査の位置づけを見直したうえで（本文参照）R3 年度は、R4 年度のインタビュー本調査に向けた予備調査とした。R4 年度の本調査では、児童生徒に対する調査員を「赤羽」、教師に対する調査員を「藤野」に一本化することで、調査の信憑性と再現性についても担保できるように設計した。
非 IB 校の選定妥当性	報告書本文に記載の通りである。統計分析の結果は、選定した「非 IB 校」が、本研究目的に照らして大きくバイアスがかかっているとは認められなかったため、選定は妥当であったと結論した。

【資料２】R3 年度研究実施体制

① 児童生徒アンケート及び同インタビューの企画・実施

赤羽寿夫（東京学芸大学教職大学院・教授・研究代表者）
杉森伸吉（東京学芸大学教育学部教育心理学講座・教授）
細井宏一（東京学芸大学附属大泉小学校・副校長）
雨宮真一（東京学芸大学附属国際中等教育学校・前期課程副校長）
坂井英夫（東京学芸大学附属国際中等教育学校・後期課程副校長）
杉本紀子（東京学芸大学附属国際中等教育学校・主幹教諭）
鮫島朋美（東京学芸大学附属国際中等教育学校・教諭）
山本勝治（同上）
小松万姫（同上）
小林廉　（同上）
嶽里永子（同上）

② 結果分析・報告書作成

赤羽寿夫（東京学芸大学教職大学院・教授・研究代表者）
藤野智子（東京学芸大学教職大学院・准教授）

なお、R3 年度報告書をまとめるにあたり、以下の 3 名の外部有識者の方々から有益な助言、および多大なるご協力をいただいた。この場を借りて謝意を示す。

原健二　　（東京学芸大学教職大学院・教授）
佐々木幸寿（東京学芸大学・理事・副学長）
荻野勉　　（東京学芸大学教授兼附属国際中等教育学校・校長）

【資料 3】R3 年度研究活動記録

2021 年 4 月 27 日（火）	第 1 回　研究組織運営会議（対面） ・アンケート・インタビュー調査依頼
2021 年 7 月 13 日（火）	第 1 回　西東京市立柳沢中学校打ち合わせ（対面） ・アンケート調査の依頼・実施方法の説明
2021 年 7 月 13 日（火）	第 2 回　研究組織運営会議（対面） ・アンケート内容の確認・インタビュー対象生徒の選出依頼
2021 年 8 月 6 日（金）	打ち合わせ（リモート） ・分析方法に関する相談
2021 年 8 月 27 日（金）	第 3 回　研究組織運営会議（対面）
2021 年 11 月 30 日（火）	第 4 回　研究組織運営会議（対面） ・調査依頼書及び承諾書の承認 ・今後の調査実施方法について打ち合わせ
2021 年 12 月	アンケート用紙配布 アンケート及びインタビュー調査の依頼書及び承諾書送付
2021 年 12 月 3 日（金）	アンケートの実施（高知西高等学校）
2021 年 12 月 13 日（月）	アンケートの実施（柳沢中学校）
2021 年 12 月中旬以降	アンケートの実施（東京学芸大学附属国際中等教育学校）
2022 年 1 月 24 日（月）	第 5 回　研究組織運営会議（対面） ・インタビュー調査に関する最終確認
2022 年 1 月 24 日（月）	インタビューの実施(東京学芸大学附属国際中等教育学校)
2022 年 1 月 26 日（水）	インタビューの実施(東京学芸大学附属国際中等教育学校)
2022 年 2 月 1 日（火）	アンケートの実施（東京学芸大学附属大泉小学校）
2022 年 2 月 21 日（月）	アンケートの実施（井之頭小学校）

【資料４】アンケート質問紙各種(小学校用、中学校用、高等学校用)

小学校用

誕生日（日にちのみ記入）＿＿＿＿日

次の質問に答えてください
答えがわからない場合、先に進んでください。

① 日本以外の国籍を持っていますか　はい　・　いいえ
はいの場合
・どの国の国籍を持っていますか　(　　)

② 海外の小学校に通学した経験がありますか　はい　・　いいえ
はいの場合
・どのくらい通いましたか
当てはまる合計した期間を〇で囲んでください（幼稚園も含む）
１年以下　・　１年以上３年未満　・　３年以上６年未満　・　６年以上
・通っていた学校はどのような学校ですか（複数回答可：その場合長い期間の方を２重◎）
現地校　・　インターナショナルスクール　・　日本人学校　・　その他

次の質問に、以下の基準で答えてください
１・・・全く当てはまらない
２・・・当てはまらない
３・・・少し当てはまる
４・・・当てはまる
５・・・とても当てはまる
今の私は・・・
③ 友だち・(おとなの人）の話をしっかり聞いて、自分の考えとして説明することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

④ 友だち・(おとなの人）と、対等に話し合い協力することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑤ 自分で決めた計画はしっかり守ることができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑥ 気持ちが落ち込んでも、自分で回復することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑦ 成功したこと、失敗したことをちゃんと反省することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑧ 人の話やテレビ等から知ったことを整理することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑨ 人の話やテレビ等からの情報について、正しいかそうでないかを考えることができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑩ 経験や学んだことについて「なぜ・・・」と考えることができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑪ 「思いついた」り、「ひらめいた」りすることがよくある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑫ 何か新しいことを考えるのに、以前の知識や経験が役に立つことがある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

ご協力ありがとうございました

中学校用

前期課程　誕生日（日にちのみ記入）＿＿＿日

次の質問に答えてください
答えがわからない場合、先に進んでください。

① 日本以外の国籍を持っていますか　はい　・　いいえ
はいの場合
・どの国の国籍を持っていますか　(　　)

② 海外の小・中学校学校に通学した経験がありますか　はい　・　いいえ
はいの場合
・どのくらい通いましたか
当てはまる合計した期間を〇で囲んでください（幼稚園も含む）
１年以下　・　１年以上３年未満　・　３年以上６年未満　・　６年以上
・通っていた学校はどのような学校ですか（複数回答可：その場合長い期間の方を２重◎）
現地校　・　インターナショナルスクール　・　日本人学校　・　その他

次の質問に、以下の基準で答えてください
１・・・全く当てはまらない
２・・・当てはまらない
３・・・少し当てはまる
４・・・当てはまる
５・・・とても当てはまる
今の私は・・・
③ 他者の考えを理解したり、自分の考えを上手に伝えることができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

④ 問題を解決するために、他者と積極的に協力することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑤ 自分のスケジュールを管理し、自らの時間管理とそのコントロールができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑥ 自分の気持ちやモチベーションをコントロールし、挫折や困難に効果的に対処することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑦ これまでの経験や学びを、しっかりと反省することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑧ 必要な情報（テレビなどで得られる知識）を集めたり、多くの情報の中から必要な物とそうでないものとを選択することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

裏に続く→

⑨ 情報を正しく理解することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑩ 得られた知識について、自分の言葉で理解し、説明することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑪ 全く新しい理由や考えを、思いつくことができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑫ 初めての問題でも、それまでの経験や知識を使って解決することができる
１　・　２　・　３　・　４　・　５

ご協力ありがとうございました

高等学校用

後期課程　誕生日（日にちのみ記入）＿＿＿日

次の質問に答えてください
答えがわからない場合、先に進んでください。

① 日本以外の国籍を持っていますか　　はい　・　いいえ
はいの場合
・どの国の国籍を持っていますか　（　　）

② 海外の学校（高等学校まで）に通学した経験がありますか　　はい　・　いいえ
はいの場合
・どのくらい通いましたか
当てはまる合計した期間を〇で囲んでください（幼稚園も含む）
１年以下　・　１年以上３年未満　・　３年以上６年未満　・　６年以上
・通っていた学校はどのような学校ですか（複数回答可：その場合長い期間の方を２重◎）
現地校　・　インターナショナルスクール　・　日本人学校　・　その他

次の質問に、以下の基準で答えてください
１・・・全く当てはまらない
２・・・当てはまらない
３・・・少し当てはまる
４・・・当てはまる
５・・・とても当てはまる
今の自分は・・・
③ 他者と意思疎通を上手に図り、関係性を円滑にする力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

④ 同じ目的のために、対等の立場で協力する力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑤ 自らの時間管理とそのコントロールができる力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑥ 自分の気持ちやモチベーションをコントロールし、挫折や困難に効果的に対処する力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑦ それまでの学びや経験を客観的に見直す力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑧ 情報を自己の目的に適合するように使用できる力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

裏に続く→

⑨ メディアからもたらされる様々な情報を主体的かつ批判的に受け止め読みこなす力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑩ 与えられた知識について、その意味を自ら考える力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑪ 既存の知識や常識にとらわれず、自由に物事を考える力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

⑫ これまでの経験や知識を、新しい課題解決に活用できる力がある
１　・　２　・　３　・　４　・　５

ご協力ありがとうございました

【資料５】R4年度研究計画

	4 月			5 月			6 月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
アンケート調査									
インタビュー調査									
大学教員			・28 日　※2		・11 日　※3		※4	※5	
共同研究者との打ち合わせ			・25 日　※１						

	7 月			8 月			9 月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
アンケート調査								※11	
インタビュー調査								※13	
大学教員	※6	※9	※10					※12	
共同研究者との打ち合わせ		※7	※8						

	10 月			11 月			12 月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
アンケート調査									
インタビュー調査	※13								
大学教員	※14								
共同研究者との打ち合わせ			※15			※16			

	1 月			2 月			3 月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
アンケート調査									
インタビュー調査									
大学教員					※17				※18
共同研究者との打ち合わせ						※19			

※1　第 1 回共同研究者打ち合わせ
　　活動内容：令和 4 年度の活動内容の説明
※2　第 1 回大学担当者打ち合わせ会議
　　活動内容：令和 4 年度研究方針の検討
※3　第 2 回大学担当者打ち合わせ会議
　　活動内容：令和 4 年度研究方針の決定
※4　本調査研究を大学内倫理審査委員会に申請書作成・提出
　　「インタビュー調査」実施に係る倫理審査
※5　倫理委員審査承認（予定）
※6　インタビュー調査対象生徒の確定
※7　第 2 回共同研究者打ち合わせ
　　活動内容：インタビュー対象者（生徒）に関する情報共有
※8　インタビュー対象生徒の保護者承諾作業（承諾要旨配布→回収）
※9　第 3 回大学担当者打ち合わせ会議
　　活動内容：インタビュー対象教員（調査対象生徒をよく知る教員）の確定
※10 教員へのインタビュー調査を各学校に依頼（IB 校・非 IB 校の小・中・高）
※11 アンケート調査の実施（インタビュー対象生徒のみ）
※12 インタビュー対象生徒から回収したアンケートの分析
※13 インタビュー調査の実施（対象生徒及び教員）（9 月から 12 月まで）
※14 インタビュー分析
※15 第 3 回共同研究者打ち合わせ
　　活動内容：報告書執筆依頼（分担執筆）
※16 分担執筆期間（共同研究者）
※17 大学教員分担執筆・編集
※18 製本・提出
※19 共同研究者校正